

## 炭鉱遺産端島（軍艦島）に関する元島民の聞き取り調査及び現地調査

長崎大学工学部 学生員 森 俊雄

長崎大学大学院 学生員 久井 英行

長崎大学大学院 正会員 後藤 恵之輔

### 1. はじめに

近年、軍艦島（正式名称「端島」）に対する注目が高まってきている。この端島は、炭鉱の島として日本の近代化を支えてきたが、エネルギー転換に伴い、1974年1月15日に閉山した。今では無人島となっているこの島には、日本初の鉄筋コンクリート高層アパートを始め、屋上緑化の先駆的な屋上農園など学術的見地からみても貴重な文化遺産が数多くあり、島そのものにも研究の要素が多く含まれていると考えられる。

そこで本研究では、元島民の方々への聞き取り調査及び現地調査を行い、当時の様々な生活の様子を浮かび上がらせるとともに、その近代化遺産としての価値を再検討することにより、今後の近代化遺産の活用方法について考えることを目的とする。

### 2. 端島の概要

軍艦島とは、長崎県長崎市（旧高島町）端島（東経129度45分、北緯32度39分）のことで、海底に広大な鉱区を持つ、海底炭鉱の島である。長崎港から18.5kmの海上にあり、総面積6.3haで東西160m、南北480m、周囲1.2km、最大高度47.7mの小さな人工島である（写真-1参照）。元は現在の3分の1程度の岩礁に過ぎず、海底を掘ったズリ等を用いた埋め立てにより現在の姿になった。明治時代には住人の数が2000名を越え、1960年頃には5300名以上の方が住んでいた。居住地区に限って考えると、1haあたり1000人以上の方が住んでいた計算になる。

端島は炭鉱により成り立っていた島であったため、炭鉱が閉山してしまっただけでなく、すぐに全ての住民が島から離れた。そのため閉山から約30年、端島は当時の面影を残したまま劣化が進行している。

端島の経緯としては、1890年（明治23年）に鍋島孫六郎から10万円で三菱が買収、その後80年間に渡り主に八幡製鉄所への良質炭を1974年（昭和49年）1月15日の閉山まで採掘していた。2001年11月21日にはそれまでの所有者である三菱マテリアル（株）から正式に長崎県西彼杵郡高島町へ無償移譲された。さらには、その高島町も昨今の市町村合併の波に洗われ、2005年1月4日に長崎市へ合併され、端島の所有権は長崎市へと移った。

### 3. 聞き取り調査

#### 3.1 調査方法

当時、端島で生活をしていました方、および端島に関わりを持っていた方を対象に聞き取り調査を行った。



写真 - 1 軍艦島の外観

#### 3.2 調査結果

今までに7名の元島民の方への聞き取り調査を行った。当時の様子が少しずつ浮かび上がってきた。

##### 3.2.1 コミュニティーについて

コミュニティーについての質問に対して、近所付き合いはあまりなかったという答えもあったが、ある坑員夫人は次のように語った。

「でも端島は天国でした。最高でした。皆さんが協力してくださったから、楽に子どもを育てることができました。」

「端島には電話が二箇所くらいにしかなくて、そこに電話があると、誰かが伝えてくれるんですよ。わざわざ直接呼びに来るんじゃないで、ことづけが自分のところに回って来るんですよ。」

これらの言葉から、現在のコミュニティーと比べ、隣近所との付き合いは深かったということが伺える。

また、別の坑員の息子で、端島で生まれ育った元島民は次のように語っている。

「コミュニティーに関しての一番の思い出はやはり、他人にも怒られるということです。たとえば、危ないところに行くと、自分の親でなくても誰からも怒られていました。今ではなかなかないことです。」

現在、青少年に関する問題が増加している。これらの問題に対して、現在では地域が協力して子供を育てていくという取り組みが行われているところもあるが、当時の端島ではそのことが自然とできていたのである。

現在、当時のコミュニティーについて私たちが知り得る術は少ない。そこで、当時の面影のままに、現在に存在する端島とともに当時のコミュニティーがどうであったかを保存することは、重要であると

考えられる。端島は炭鉱の島という一面の他に、コミュニティ形成都市のモデルともいうべき一面も持っていたと考えられる。

### 3.2.2 建物について

建物について元島民は次のように語った。

「高層アパートではありましたが、階段の高さがそんなに高くなかったと思います。若いこともあったからかもしれませんが、上り下りはそんなに苦労しませんでした。」

エレベータが設置されていない高層アパートの中で、少しでも快適な居住空間になるような細やかな工夫がなされていたのである。また、端島では、限られた居住区の中で最大限の収容能力が求められたことと、建物が集中しているため火事に強い素材を使用する必要があったことから、鉄筋高層アパートが次々と建造された。

### 3.2.3 島の催しについて

当時、端島の中では様々な催しが行われていた。そのひとつが毎年4月3日に行われていたという山神祭である。この他にも、秋の端島小中学校の運動会や職場対抗の野球大会、和裁や洋裁、お花や料理教室などが公民館で行われ、住民参加のイベントが多くあったのである。

これらの様々な催しは、端島の住民がお互いに顔を合わせる機会を与え、この催し物の多さが端島のコミュニティ形成の一部を支えていたのではないかと考えられる。

### 3.2.4 屋上農園について

端島において注目されることが、当時この端島内において屋上農園が存在したということだ。他にスペースがなかったということで、屋上に土を運びトマトやキュウリなどを栽培していたということである。さらに驚くべきことには屋上で稲作が行われていたということである。コンクリートに覆われた、限られた空間の中でいかに緑を育てるかという、当時の生活の知恵がこの端島には詰まっている。

この屋上農園に関して現在、屋上緑化の温暖化を緩和する効果について研究が行われているが、この端島の屋上農園は日本で先駆的な屋上緑化をしていたことになる。

## 4. 現地調査

聞き取り調査と併せて、現在の端島の護岸や島内の建物の劣化状況等について現地調査を行った。

端島の護岸は、長年にわたる台風や高波により崩壊の危機にある部分が多い(写真-2参照)。端島はその形状に大きな特徴をもつ。護岸の崩壊から建物が今以上に崩壊することは軍艦島の最後を意味する。この貴重な近代化遺産を守るためには、まずは護岸の補修・補強が急務であると言える。

端島では、最も古い鉄筋コンクリート造りの建物が1916年(大正5年)に建てられてから、現在までおよそ90年の年月が経っている。90年前の鉄筋



写真 - 2 護岸の破損部分

コンクリートが現在、どの程度劣化しているのかを把握することは、今から90年後における鉄筋コンクリートの建物の状態を推測する大きな手がかりになる。端島では、1974年(昭和49年)の閉山からの30年間は建物に人の手が加えられていない。さらに、端島は周りが海に囲まれ、塩害の影響を受けやすい環境にある。現在、新しいものをつくる時代から、今まで作ってきたものを維持・管理することが重要な時代になってきている。この分野の研究において端島は、この上ない研究素材になるのではないかと考えられる。

## 5. 近代化遺産としての保存・活用

この端島に関しては文化遺産としての保存の動きも活発に行われている。端島は炭鉱施設だけでなく、従業員宿舎、商業施設、娯楽施設を含め、島全体が一括してほとんど当時のまま残っている。このような形で現存する炭鉱遺産は世界的に見ても極めて稀であり、端島は貴重な近代化遺産の一つと言えるのではないかと考えられる。

また、端島の近代化遺産としての活用については、2004年7月から軍艦島クルーズが始まっている。これに合わせて、2004年の5月から7月にかけて長崎広域体験学習協議会や(社)長崎観光連盟が中心となり軍艦島クルーズガイドの養成も行われた。また、端島は修学旅行生などの学習素材としても事前学習、事後学習が行いやすく、修学旅行先としても早くも活用され始めている。このように端島は、地域振興の種として様々な形で活用され始めている。

## 6. まとめ

今まで文化遺産の保存に関しては、建築物や施設などハード的な部分を中心に行われてきたと考えられる。今回、近代化遺産の保存の一例として端島についての聞き取り調査を進める中で、このようなハード面とともに人間の営みそのものを示すソフト面の保存の重要性も再検討することができた。

## 参考文献

- 1) NPO法人「軍艦島を世界遺産にする会」資料サイト : <http://www.interq.or.jp/cool/unya/gunkanzima/>